

目次

陰謀の島

5

訳者あとがき

317

解説 三門優祐

320

主要登場人物

ジョン・アプルビー	スコットランドヤード ロンドン警視庁の刑事
ハドスビス	スコットランドヤード ロンドン警視庁の刑事
レディ・キャロライン	ハロゲイトの貴婦人、警視監の姉
レディ・アプルビー	ハロゲイトの貴婦人、ジョンの伯母
ルーシー・ライドアウト	行方不明の少女
ハンナ・メトカーフ	魔女と噂される娘
エメリー・ワイン	国際的なビジネススマン
ビーグルホール	ワインの秘書
ミス・ムード	南米へ向かう女性
ミセス・ナース	南米へ向かう女性
モレル大佐	十八世紀のホーク・スクエアの住人
バートラム大尉	モレルの幽霊の目撃者
ミスター・スマート	十九世紀のホーク・スクエアの住人
ドクター・スペッティギュー	スマートの幽霊の目撃者
ダフォディル	不思議な能力をもつ馬

第一部 破滅へ向かう道

その部屋は殺伐として、すべてが静止していた。表にショーウィンドーを構えた店の中によく似ていたが、より広く、がらんとしていた。デスクに座っている男は、毎日出勤するその部屋に心地よさを求めようなどと思つたこともなかつた。快適さはまるでないが、不快感もない。完璧なまでに無機質なその環境について、部屋の主があえて評価するとすれば、まちがひなくその厳格さだろう。春の陽光さえ、カーテンのない高いガラス窓から差し込むと、寂しく機能的な光に変わるのだった。

大きな窓だった。這うように移動する平行四辺形の光の中に、大きめのデスクがぼつんと置かれていた。その四角い光の中を、そして身じろぎひとつせずにデスクに座っている男のすぐ目の前を、斜めに伸びる一本の巨大な影が通り過ぎた。往復するように、二十回ほど横切っていく。まるで部屋の外に荒れ果てた遊園地があつて、見上げるほど高い観覧車がのろりと回転しているかのようだ。男は突然立ち上がり、両手を後ろに組んで窓辺に歩いていった。ここ、スコットランドヤードロンドン警視庁の高層階の窓から見下ろすと、一面に戦時下のロンドンが広がっていた。

破壊されて骨組だけになった高い建造物の上に、クレーンだかシヨベルだかデリックだかわからないが、何らかの重機が一台、絶妙なバランスで設置されている。見晴らしのよさそうな高みから、半分だけ残つた隣の建物を器用に叩きついたり、削つたりしている。悲愴な、あるいは腹立たしい光景

と呼べるのかもしれない。現に下の通りを行く歩行者の多くは、怒りという感情を再認識しているのが全身から見てとれる。だが、現実的な思考をする人間であれば、感情を自制し、瓦礫の片づけが順調に進められていることに満足、あるいは批判的に評価できるものだ。そして、窓から下界を見下ろしているこの男は、いかにもそういう思考の人間なのだ。無駄を省いた動作には人間味や特別な意味はない。考え事をしているときも、憶測で目が曇ることはない。ただし、眉だけは常に固くひそめたままだ。デスクから窓辺へ向かうときも眉根を寄せていたし、こうして外を見下ろしながらも、眉間にさらに力を込めることも緩めることもしなかった。

ハドスピスは窓の外の光景を、ただあるがままに受け入れていた。現実的な思考をする人間のひとりとして外を見下ろし、そのありさまを認識した。次の爆撃の際は、あそこが危ない、あそこは持ちこたえてくれそうだと。一方、道徳家のひとりとしては、別の認識をしていた。ある言葉が口をついて出た。『卑劣』。この光景はまちがいに卑劣そのものだ。では『邪悪』でもあるのか？ そうは思わなかった。『邪悪』という言葉がもたらす短絡的な怒りや無分別を考えると、それはふさわしくないと考えた。ハドスピスはこの十五年間、知的障害のある少女たちの誘拐事件について、また彼女たちのその後の安否についての捜査資料を管理してきた。そこにこそ強い怒りをおぼえていた。それに比べれば、このロンドンの光景から感じる憤りは高が知れている。こうした捜査を一年、また一年と重ねていくうちに、その怒りはいつそう心の奥深くに焼きついて、今では彼という人間の最も内なる根幹を成していた。これまで彼が直面してきたのは、理由もなく平気で人を欺ける人間の罪だ。なぜなら、このご時世であればどこへ行こうと、知能のまともな少女たちを誘惑し、孤立させ、取り引きし、売り飛ばし、金で雇うことは、さほど苦もなくてできるはずだからだ。にもかかわらず、あえて

知的障害のある少女たちを狙うという下卑た行為は——ひと言で言うなら、腹立たしかった。『邪悪』とは腹立たしいものだ。いや、むしろ、それにほとんど誰も気づいていないことが腹立たしかった。たいていの人間が理解できるのは、『卑劣』までだ。ハドスピスはロンドンの街を見下ろしながらそう思った。『邪悪』を真に認識する者よりも、神や永遠の命、それに理性という理念を認識している者のほうが多いだろう。だが、かつて誰かが言っていたように、『邪悪』という揺るぎない存在に比べれば、それらはただの上部構造か表層部にすぎない……ハドスピスには教会に通う習慣はなかったが、『邪悪』をこのように認識した彼は、きわめて信仰的な人間だと言えた。ハドスピスはその下劣で気の滅入る特殊な捜査を、まるで白鯨を追い求めるエイハブ船長のように漠然と、危険なまでに激しく突き進めてきた。それ以外のものは一切気にも留めず——たとえば、このオフィスのように。

その彼のもとへ、新たな少女失踪の報告が届いた。風変わりな名前の少女だ。ルーシー・ライドアウト。今回は遠出をしすぎたのか……寂しげな陽光の中で、ハドスピスも寂しげな笑顔を浮かべた。が、その光が目に入ることも、心に留まることもなかった。

知的障害のある少女か。

「馬ですか！」

二つ下の階にいたジョン・アプルビーは、最近警視監に再任したばかりの老紳士の顔を、信じられないとばかりに見つめた。「馬ですか？」アプルビーはもう一度言った。馬の捜索を命じられるなど、初めての経験だ。

老紳士はあやふやにうなずいた。ひと昔前とちがって、今は優れた人間が低い階級に、力量のない

人間がいくらでも高い階級に就いている。そんな矛盾はどうでもいいと、彼は思っていた。だが、ときにはそれが気まぐれに感じられる相手もいる——こんなふうには、礼儀をわきまえなければならぬと思わせる相手が。「そうだ」警視監は言った。「馬が」まだ説明が続きそうな、尻切れトンボな言い方だった。とりあえず、自信たっぷりに断言できる言葉を探して間を空けた挙句、「座りたまえ」と言った。

アプルビイは座った。「それでしたら、アンブラーが適任ですよ」彼は望みを託すように提案してみた。「たしか、アンブラーは馬に詳しいはずですから。〈クルセーダー〉が一九三〇年のダービー直前に逃亡したときも——」

警視監は首を振った。「いや、ちがうんだ。競走馬じゃないんだ。そんな価値のある馬じゃ——まったく価値のない馬なんだよ。それにこれは、正式な捜査と言えるものではないんだ」訝しげに顎を掻こうとして、手を止めた。「実を言うと、姉から頼まれた案件なんだよ」彼は曖昧に言った。

「そうですね」アプルビイの中で、その怪しげな馬探しに対する嫌悪感が膨らんでいった。

「姉はハロゲイトに住んでいてね。退屈な田舎町だ」警視監はなんとなく申し訳なさそうに言った。

「きみも知っていると思うが」

「実は、わたしの伯母もハロゲイトに住んでいるんです」

「そうなのか」警視監は何か考えるように自分の足の爪先を見つめた。「それなら、ひよっとして」思いきって訊いた。「きみの伯母さんはわたしの姉を——」

「レイ・キャロラインとは懇意にさせていただいているはずですよ」

「ほう、それは奇遇だなあ」くだらない感想を口にしながら、警視監は爪先をますます熱心に観察し

た。レディどうしが知り合いだとわかったところで、話が進めやすくなったのかどうかは何とも言えなかった。そこで、ユーモアを混ぜる作戦に切り替えた。「ひよっとすると、きみの伯母さんにはお気に入りの辻馬車があるのかな？」

「どうでしょう。でも、きつとあるんじゃないでしょうか」

「そうか、姉のキャロラインにはあるんだ——いや、あつたと言うべきか。ある真面目な御者とおとなしい馬の馬車が、ひどく気に入っていた。これまでは、ミス・メイドメントが馬小屋に電話をして——ああ、メイドメントというのは、姉の同伴者コンパニオンなんだが——いや、ミス・メイドメントは、住み込みの付き添いオアシ婦なんだが——」当惑した警視監が急に口をつぐんだ。「何の話だったかな？」

「ミス・メイドメントが馬小屋に電話をしたとおっしゃったところでした」

「そうだった。それで、かつては、きちんとした御者とおとなしい馬の屋根なしランドー馬車を一台と、そう頼んでいた。が、あるときから単に、ポドフィツシュと黄水仙クラオキテルと指名するようになった」警視監は間を置いた。「ポドフィツシュとダフォオデル」もう一度繰り返した。「前者が御者、後者が馬の名前だ。説明するまでもなかったかな。ミスター・ダフォオデルという人間はいるかもしれないが、馬にポドフィツシュと名付ける者はいないだろうからな」

「おっしゃるとおりです」

警視監は困りきつているように見えた。「なあ、きみ」彼は言った。「退屈な話だと思っているだろう。だが、とにかく聞いてくれ。最後には、とんでもない展開が待っているんだ」

アプルビーはその老紳士にかなり好感を抱いていたので、いかにも興味があるような明るい作り笑いを浮かべた。「ひよっとすると行方をくらましたのは、そのダフォオデルではありませんか？」

「そのとおりだよ。姉は当初、ダフォデイルは死んだと聞かされたそう。一番のお気に入りだったし、それほど年老いた馬でもなかったんで、姉はショックを受けた」警視監はそこでためらった。「実のところ姉は、かの詩人と同じ気分だったんだ」

アプルビーはほほ笑んだ——今度は偽りのない笑みだ。「ええ、なるほど。美しき水仙よ、そんなに早く去ってしまうのが悲しくてならない」(イギリスの詩人ロバート・ヘリングの詩より)というわけですね」

相手の文学的教養をさりげなく探るような自分の発言に、大いに満足できる答えを得て、警視監は力強くうなずいた。「そのとおり。まさしく、そのとおりだよ——さすがだね。姉は当初、馬は死んだと聞かされた——おかしな噂を立てば、商売に差し障ると思われたのだろう。ところで、わたしの姉というのはひどく詮索好きでね、礼儀をわきまえた古人なら、目の鋭い人」とでも言ったのだろうが。とにかく、姉は馬が死んだいきさつを詳しく訊こうと、ボドフィッシュを呼びつけた。ボドフィッシュは姉のもとへ来るには来たが、残念ながら酒に酔っていた。馬のことがショックだったんだろ
うな。キャロラインはすぐにメイドメント——いや、ミス・メイドメント——に馬小屋に電話をかけた。きちんとした御者とおとなしい馬の箱型馬車を一台頼んだ。姉はその馬車でボドフィッシュを家まで送り届け、彼の妻に、健康によくて食欲をそそるココアの淹れ方を教えた後、ダフォデイルの持ち主を探ろうと、あれこれ質問した。そこで、馬が実は盗まれたと知るや、すぐにわたしに緊急の電報を寄越したのだ。これはスコットランドヤードに知らせなければ。その考えが真つ先に浮かんだらしい。スコットランドヤードで働いている弟がいるのだから、そう思うのも当たり前なのだろう

——たぶん」

「ええ、実に当たり前のことです」

「当然ながらわたしは、そういう案件は地元警察の管轄だと言った。すると、なんと姉は、地元警察署の本部長に会いに行つたんだ、お抱え弁護士を連れて。警察署で話を聞いてみると、ダフォデルの一件についてはろくな捜査もされていなかった。おまけに、任務に忙殺されている部下を守る立場の本部長から冷たくあしらわれたらしい。いや、最初はちがつたと思う。たぶん本部長も初めは、警察が今どれほど仕事を抱えているのか、説明してくれたのだろう。戦争に関する当たり障りのない機密情報をいくつか織り交ぜながら。だが姉は、単に好奇心が強いだけでなく、特別にしつこい性格で、かつしてはぐらかされなかつた。水仙か、さもなくば何もなしかが、モットーに掲げてね。わがままと、真実が知りたいという気持ちに突き動かされていたのだと思う。なにせ、ハロゲイトじゅうの馬の中で姉が本当に信頼していたのはダフォデルだけだつたし、何があつても追跡すべきだとかく信じていたからね。その気持ちがあまりに強すぎたのだろうが、しまいには本部長に追い返された。そこで姉は家に帰り、その一件についてじっくり考え直した末、長く堂々たる詫び状をミス・メイドメントに口述筆記させた——これで一応の筋を通したのだから、不作家者と咎められるいわれはないとばかりに、翌日の午後、哀れな警察本部長のもとを再度訪れたわけだ。本部長は少々面食らつていたがね」

「そうでしょうとも」

「そう、ひどく面食らつていた。そこで姉に、ちよつとした皮肉を言つたのだろうな——スコットランドヤードに相談してみてもはいかがかと。ところがキャロラインは、すでに弟とは連絡を取つていと伝えた。さすがの本部長もこれにはまいつたらしく、それならお好きにどうぞと——その——われわれに投げて寄越したというわけだ。つまり——いや、なかなかデリケートな話でね」

「ええ」

「姉は、実に質素な暮らしをしている。知つてのとおりわたしの一族は貴族でも何でもない」老紳士は魅力的な笑みを見せた。「だが、姉の亡き夫の一族は——」

「ええ、よく存じています」

「つまり、姉はその義理の兄弟たちから——」

「おっしゃりたいことは、よくわかります。それで、わたしにハロゲイトへ調べに行つてきてほしいというわけですね？」

警視監が悲しげにため息をついた。「実に、デリケートな頼みごとなんだ。でも、きみにはちよつどいいんじゃないか、ひどく疲れて見えるから」失礼な発言ではあつたが、そのとおりだった。「きみだって、そういうもんでもない大事件ばかり追いかけてはいられない。たった一年のあいだに、スコットランドの荒野でスパイと戦つたかと思つたら（『アプルビー長編第五作』、『The Secret Vanguard』）、船が沈没して無人島に流れ着いて（『アプルビー長編第七作』、『アララテのアプルビー』）、さらには——」

「行けとおっしゃるなら、もちろんハロゲイトへまいります」

「週末だけでいいんだ。とても長閑のどかない所だし」警視監は、この時点で気まずさが頂点に達したらしく、もう爪先など見たくないとはかりに足をデスクの下に突っ込み、失望感を隠そうともせずアプルビーに目を向けた。「なあ、たしかにきみなら、あの馬を見つけ、出せるかもしれない」彼は当惑したように首を振つた。「そうなれば、姉はきっと喜ぶだろう——だが、地元警察はどう思うかね？」弱々しい笑みを浮かべて言つた。「ダフォイルを見つけたかどうかは、きみの判断に任せるよ。あの馬の価値は十五ポンドなのだそう。そう言えば、まだ説明していなかったな」

「例の、とんでもない展開ですね？」

「そのとおり」警視監の表情が明るくなった。「本当に驚くような話なんだ。シャーロック・ホームズのところへ持ち込まれた、小さな、だが当惑するような謎に似ている。実のところ、ダフォォデイル失踪事件には、本物の謎が秘められていると思う——謎なんて、うちにだってそう毎日持ち込まれるものじゃないだろう？ 真に首をかしげるような謎は、犯罪という大海の中に小島のようにぽつんと浮かんでいるにすぎない」そのイメージの何かが引っかかったらしく、警視監はそこで口をつぐんだ。「問題の馬小屋は、いわゆる、ライブリー・ステイブル」と呼ばれる形式のものだ。つまり、有料で馬車を貸し出している。だが、もともと、ライブリー・ステイブルというのは、個人の所有する馬を預かって世話をしていたんだ。どうやらこの馬小屋では、ある人物に今もそうしたサービスを提供していたようだ。何とか大尉という戦車乗りらしいが、ときには馬にも乗りたくなるのだろう。その男がダフォォデイルの隣の開放型馬房に、何百ポンドもの価値のある馬を預けていた。そして、彼の馬が先に盗まれたんだ」

アプルビーが素早く顔を上げた。「まさか——？」

「そうだ。立派な体格のその高価な馬が、夜中に盗まれたんだよ。翌朝は大変な騒ぎで、ダフォォデイルや馬小屋の中を気に留める者は誰もいなかった。常識的に考えれば、鍵をかけるとか——」

「おっしゃるとおりですな」

「するとその日のうちに、よく見かけるような馬の運搬車両がやって来てその何とか大尉の馬を馬小屋に戻すと、入れ代わりにダフォォデイルを連れ去った——何が起きているのか、誰もはっきりと認識できないうちに。どうやら最初の盗難はまちがいだっただけだ。本当に狙われていたのは、ダフォォデ

イルのほうだったんだ」

「ダフォデイルにほとんど価値がないのは、まちがいないんですか？」

「価値はないという話だ——もちろん、ハロゲイトの通りを安全に移動したいと願う姉にとっては別だが。ダフォデイルはまだそれほど年をとっているわけではないが、膝を怪我しているとか、息切れがするとか、何かしらの欠点はあった」

アプルビイは首を振った。「レデイ・キャロラインがそんな負傷した馬を信用されるのはいかがなものかと思えますね」

「きつと姉は、あの馬の面構えが気に入ってたんだろう。とにかく、ダフォデイルは価値のある馬ではなかった」

「血統がいいとか、種馬に適していたとか——そういう動機も考えられないのですね？」

「いやいや、きみ！ ボドフィッシュは——いや、ダフォデイルだった——そういう——その——その手の馬ではなかったよ」

「そうでしょうね」アプルビイは立ち上がった。「たしかに、少し奇妙な話ですね。では、金曜日の朝一番の列車で行ってまいります」彼はオフィスのドアの前で立ち止まった。「ダフォデイルについて、ほかに聞いておくべき情報はありませんか？」

「実を言うと、もうひとつある。馬にはおかしな話なんだがね。だが、どうやら——キャロラインが鼻^{ひなき}にしているにもかかわらず——その、どうも知能の低い馬だったらしい。いったいどういうことなのか、わたしは馬について詳しくないので何とも言えないが」

知的障害のある馬か。スコットランドヤードの廊下をぶらぶら歩くアプルビイの目に馬の姿が見え

てきた——たしかに、わたしは疲れているにちがいない。彼の心の目に浮かんだのは、何頭もの怪しげな馬たちが、同じ数の何とか、大尉の高価な馬たちのほうへ、頭を振って元気にステップしながら、跳ねたり、お辞儀をしたりしている情景だった。こんな陽気な仲間と会うのを喜ばない警察官がいるだろうか……。

知的障害のある馬か。

温かい風に吹かれても、ハドスピスは何も感じなかった。捜査を一件また一件と精力的にこなしながら、哀しい気分を拭うことができなかったからだ。ほかの人間にとつて六月のピカデリー・サーカスは、かつてあふれ返っていた花々の亡霊を懐かしむ場なのかもしれない。遠い郊外へ向かうバスの停留所で、いくつか小さくかたまつて風にそよいでいたスマイレ。リムジンでどこかへ運ばれていった、たくさんのバラの花束。カーネーションは、セント・ジェイムズをひとりで歩く者の胸に挿してあったり、〈ホワイツ〉(セント・ジェイムズの紳士クラブ)の出窓の奥に見えるタキシードの胸元でほんやりと光ったり、〈ブードルズ〉(リバプールの宝飾店)の田舎者のツイードを飾つたり、イギリス諸島からロンドンの中心地の五百メートル以内まではるばる集まってきた強者たち(つわもの)のたまり場〈トラベラーズ〉(ベルメルの紳士クラブ)で、より格調高いランの花と競い合つたりしたものだ。だが、ハドスピスはこうしかつての花々の幻影を眺めに来たのではなかった。ジャーミン・ストリートを疑わしそうな目でちらりと見て、〈アテナエウム〉(ベルメルにある、教養の高
い人間が交流するクラブ)は認めるような目で同じくほんのちらりと見てから、足音を立てて階段を降り、道路を渡つて公園のほうへ歩いていった。公園は、まるで葉物野菜を散らしたカウンターのの上に、細長い青緑色のシルクのリボンを載せたかのようにだ。公園にはいつもどおり水鳥がいた。政治家が何人か、鳥たちの生態をじっくり観察するように立ち止まっている。その政治家たちを、ハドスピスも何

となく顔見知りの刑事たちが物陰から見張っていた。ハドスピスはそのままずんずん歩いていった。今彼の目に映っているのは、内なる暗い世界だけだ——騙された少女たちが円を作って、花輪のようにふわふわと浮かんでいる。薬を投与された者や、催眠術にかけられた者、着ている服を全部盗まれた者……ハドスピスははずんずん歩き続けた。まるでアン女王の館の裏に、ロンドン地下鉄の時計台の下に、ひよっとするとヴィクトリア駅のどこか近くに、なかなか見つからない例の白鯨が潮を吹きながら泳いでいるはずだと信じているような足取りで。

ライドアウトか。高貴な名前ではなさそうだとハドスピスは思った。しかし、彼女の住所——ここ、ウエストミンスターの郊外にあるメイド・サービス付きアパートメントの一面——は、いかにも裕福そうな所だ。もしもライドアウト一家が裕福なら、ハドスピスはより厳しい態度で臨むつもりだった。詳しい情報は一切聞いていない。第一報は混乱していることが多いので、読まないことにしていた。今回いなくなった少女には、ミセス・ライドアウトという母親がいることだけはわかっていた。これはいいスタートだ。一般的に少女たちが失踪する原因は、母親——失踪した少女に母親がいればだが——であることが多いからだ。ミセス・ライドアウト自身が白鯨だとまでは思わないが、銛もりの一本や二本は打ち込むべき存在かもしれない。ハドスピスはいつもこうやって、あらかじめ頭の準備体操をしていた。足を速め、角を曲がると、目的の家は目の前にあつた。

ライドアウト一家は、ひどく質素な部屋に住んでいた。予想が外れて、ハドスピスは少しがっかりした。母親はそこで掃除婦、娘はウエイトレスをしており、本来なら「アパートメントの外」に住んでいるはずだった。ところが、彼女たちの住まいは最近、夜のうちに跡形もなく破壊されてしまった。そこでミセス・ライドアウトは、近々仕事をやめて田舎の姉の家に身を寄せることに決めた。勤め先

のサービス付きアパートメントの管理人はライドアウト母娘の労働力を失うわけにいかず、アパートメント内の限られた、だが生活するには十分な空間をふたりに提供したのだった。地下へ降り、アイロン部屋と小さな貯蔵室をふたつ通り過ぎた先が、ライドアウト家の仮住まいとなった。

そこまでの情報を、ハドスピスはアパートメントのポーターから聞き出した。彼自身も、まるでこのエレベーター・ボックスの中で暮らしているようだった。憂鬱そうなポーターの操るエレベーターに乗り、冷え冷えとした、薄暗く陰気な地下へと降りていく。ハドスピスにとつては馴染みのある世界だ。かの詩人（イギリスの詩人 T. S. エリオット）同様に、いや、むしろ職務上必然的に、ハドスピスは、メイドたちの失望した魂（「エリオットの詩」（エリオットの詩「窓辺の朝」より））について、よく知っていた。破滅が彼女たちの落胆を、入口の門で芽生えさせることも知っていた。そして——彼は自分に言い聞かせた——この知恵おくれのウエイトレス、ルーシー・ライドアウトについても、わたしは知り尽くしているのだ。定住する家のない不安定さ。話の噛み合わない親と同居する狭い部屋。プライバシーの欠如。絶えず目にする上階の豪華な、少なくとも裕福そうに映る暮らしぶり。すぐにまた出て行く短期滞在の男たち。彼らもまた定住する家を持たず、追い出された身の上であることが多い。こうしたことの中に、さらには、写真や、魅惑的に見せかける広告や、拍動するセクシーな音楽の中に、彼女が姿を消した背景が浮かび上がってくる。同様の事件を何百件と調べてきて、すっかり身に染みている。だからハドスピスは、ずんずんと歩き続けた。豊富な経験と、何度も試した手法から得た自信に胸を張って。ハドスピスは悪魔に立ち向かうために前進を続けた——だが奇しくも、はるか遠くで、まさにその悪魔が彼自身を待ち受けていることに、このときはまだ気づいていなかった。

ミセス・ライドアウトの部屋には、女友だちが集まっていた。上階の世界の表現を借りれば、彼女

〔著者〕

マイケル・イネス

本名ジョン・イネス・マッキントッシュ・スチュワート。1906年、スコットランド、エディンバラ生まれ。オックスフォード大学を卒業後、リーズ大学で講師として英文学を教え、アデレード大学に赴任後は英文学教授として教鞭を執った。36年、渡豪中の船上で書き上げたという「学長の死」で作家デビュー。46年にオーストラリアより帰国し、クイーンズ大学やオックスフォード大学で教授職を歴任する。94年、死去。

〔訳者〕

福森典子（ふくもり・のりこ）

大阪生まれ。国際基督教大学卒。通算十年の海外生活を経験。主な訳書にマイケル・イネス著『ソニア・ウェイワードの帰還』、『盗まれたフェルメール』（いずれも論創社）など。

いんぼう しま
陰謀の島

——論創海外ミステリ 244

2019年11月30日 初版第1刷印刷

2019年12月10日 初版第1刷発行

著者 マイケル・イネス

訳者 福森典子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1868-9

落丁・乱丁本はお取り替えいたします